黒のシンボリズム（2）
― ヒエロニムス・ボスとシバの女王 ―

神原　正明
倉敷芸術科学大学芸術学部

（2018 年 10 月 1 日　受理）

黒人が登場するヒエロニムス・ボスの作品群の中に、二つの動向がある。一つは『三王礼拝』の主題で登場する黒人王である。もう一つは『快楽の園』での黒人の裸婦だが、異なるのは黒人王が極めてリアルな、肖像としての黒人を描くのに対して、『快楽の園』では肖像的要素は少なく、アフリカ人の特徴をとらえて、黒人女性一般として描写されている。ともに 1500 年前後の制作だが、当時、黒人に接してそれを肖像画として描く具体例を考慮しながら、本稿では「黒のシンボリズム」という主題を探究していく。『三王礼拝』では黒人男性の、『快楽の園』では黒人女性の魅力が下敷きとなっており、奴隷貿易の西ヨーロッパでの実情も盛り込み、社会史的な視点からも論点を整理していきたい。

ヒエロニムス・ボスと黒人

ヒエロニムス・ボスの作品中でこれまで黒人の表現が注目されてきたのは、プラド美術館に所蔵される『三王礼拝』で登場する黒人王［図 1・4］である。これは 1500-10 年の小祭壇画だが、物腰といい衣装や装飾品といい、実に見事な若々しいアフリカ王を描き上げた。1480 年以降、黒人王はヘラルド・ダーフィット［図 2］やヘールトヘン・トート・シント・ヤンス［図 3］の作品にみるように、ネーデルラント図像学で標準的な姿だった[1]。現在この作品が所蔵されるスペインは、15 世紀にはフランドルとドイツ画派の様式に従っていた。東スペインではイタリア影響が強く、黒人王の表現はいくぶん遅れたが、内陸部のカスティリアでは黒人王は 1470 年以前

図 1

図 2

図 3

からすでにあった。ポルトガルでの三王礼拝のイメージは15世紀ではまれだったが、フランドルから黒人王表現が入り込むと、1500年頃には標準的なものになっていた[2]。

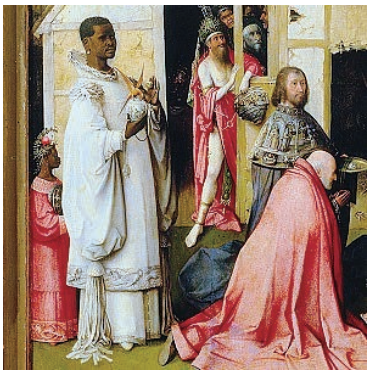

図4

ボスの描く三王については、黒人表現だけでなく図像学上興味ある議論も多い。ことに戸口に立ち、王冠をかぶり、さらに手にも別の王冠を持つ半裸の人物［図4］は謎めいている。この第四の王については、いくつかの解釈が提案されている。ヘロデ王だという見方がある[3]。よくみるとこの人物の脚にただれた傷跡が見いだされるが、それはヘロデの罪に対する報いのしるしだという。アンチクリストだという見方でも、金の足かせをされたレプラ患者というのが論拠となっている[4]。終末の日を前に現われる偽りのメシアであるが、なぜこの場に同居しているのかに、十分な説明はない。第四の王と対比をなすように黒人王が立っているが、手にもつ白い球体の上には旧約聖書からの場面で、ダヴィデの前にいるアブネルの表現がみられる。マギの礼拝の「予型」prefiguration となるものであり興味深い[5]。アンチクリストと三王との関係を示すものとしては、13世紀に神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世にあてられたミステリアスな手紙が残っている。はっきりとアンチクリストとわかる「メシア」が現われて、「王にして君主バルタザール」の到来を待っていると記述する[6]。アンチクリストによって崩壊する三王伝説の表現は珍しいが、1440–50年頃のバヴァリアの写本では、アンチクリストの前でひざまずく三王のうち、三番目が黒人だ。一人の黒人の従者がそばにいて、黒人の頭部を掲げたバナーを手にしている。

『三王礼拝』に先立って、同じく現在プラド美術館が所蔵する『快楽の園』が制作されている。この作品の写真図版が公開されたのは1898年が最初で、その後最初のモノグラフが1907年に出版される[7]。これ以降美術史家だけでなく精神分析学をはじめさまざまな領域の研究者が解釈を巡っての論戦に加わる[8]。ここでボスはゾウやキリンをはじめ、はじめてみるさまざまな驚異に目を向けている。黒人の発見もその一つだ。制作年の推定もそれらと連動する。南ヨーロッパのイチゴに似た果実マドローニョ madroños の栽培の歴史とも関係する。「悪魔のカギツメ」ibicella lutea の名をもつキバナツノゴマの種子、エデンの園のドラゴンツリー（龍血樹）など、珍奇ともいえる驚異に当時のネーデルラントは歓喜しただろう[9]。

現在のオランダに居住するボスが、スペインに行ったかどうかは定かでないが、黒人表現を問題にするときには、イベリア半島での諸事情は見落とせない。加えて1660年代以前のアフリカの奴隷貿易でのイギリスの関与についての研究がある。15世紀末から16世紀初めのイベリア半島でのアフリカ奴隷の貿易に関わった国からは、一線を画したイギリス人商人の役割を探究している。中世末のポルトガルの海洋史と特にスペインのメディナ＝シドニア Medina-Sidonia 家の役割を言及したあとで、50人を超えるイギリス人商人をあげる。著者のウンゲラーは、最後にボスの絵に登場する黒人を取り上げ、黒人に対する画家の革新的な見方を指摘する[10]。突破された

新地平は、黒人表現の解読である。メタファーとしてではなくて、ボスが体験した実在の人物として黒人を描くという点だ。最終的にはボスは奴隷制度に疑問を持ち批判しているという飛躍した仮説に至る。著者はボスが重要な役割をはたした一人のイギリス商人と同時代だということで、その表現を黒人に影響されたと考えていた。しかしボスはイベリアの黒人存在ではなく、当時すでにネーデルラントにいたアフリカ奴隷に影響されたかもしれない[11]。とはいえイベリア半島を経由してネーデルラントに入ってきたエキゾティシズムは、新大陸の発見と連動して黒人の驚異を受け入れたということに間違いはない。

アフリカのキリスト教

アフリカから黒人がヨーロッパに来るまでには、キリスト教が深く関与している。エチオピアはブルーナイルの上流、高地にあり、西暦 300 年代にキリスト教化されたが、その後の数世紀は政治的宗教的に分断している。紅海を越えてイスラム教が侵入するが、一方でユダヤ教に改宗した部族もある。13 世紀の中頃にキリスト教の王朝が出現する。エクノ・アムラク Yekuno Amlak が登場し、ソロモンとシバの女王の息子であるメネリク Menelek の子孫を名乗った。エジプトの南部、ナイル川中流にあるヌビアも、6 世紀にキリスト教化され、1300 年代初めにイスラム勢力がエジプトを征服するまで続いた[12]。エチオピア人は自分たちを神に選ばれた民とみた。「第二のイスラエル」としてキリスト教の純粋性を維持した。イスラエルの失われた 12 の部族と同一視し、ソロモンとシバの女王の結婚から続く王の系譜と考えた[13]。次のような記述が残っている。「エチオピアを取り巻くギオン Gyon は、黒人の土地で、プレスター・ジョンの地だと言われる。ここの川はナイル川と考えられ、アバスティ Abasty と呼ばれる地でできた大地の裂け目を通ってエジプトにそそいでいる。聖マタイのキリスト教徒がいるところだ。彼らに対してスルタンはこの川のゆえに貢物を払う。この水がエジプトを閉ざし滅ぼすことができるからである」[14]。

伝説上のキリスト教国の君主プレスター・ジョンは主にはインドと結びつけられていた。インドは中世末期では東アフリカの地域とされた。ケルンに残る文献には、プレスターはインドからきて、ヌビアを統治している。最も興味深いのは神聖ローマ皇帝とプレスターとの関係だ。1280–1300 年頃に書かれた物語の中で、プレスター・ジョンはインドの君主とされるが、神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世に大使を送っている。その使命はシュタウフェン家出身の皇帝の英知を評価することだった[15]。1370 年頃の神聖ローマ皇帝カール 4 世にあてたイタリア人の手紙では、プレスター・ジョンを偉大なインドから来る、エチオピアとヌビアほかの国々を支配した王の息子と呼んだ。1375 年の有名な『カタロニア図』Catalan Map［図 5］ではヌビアの南にあるエチオピアに王冠をつ

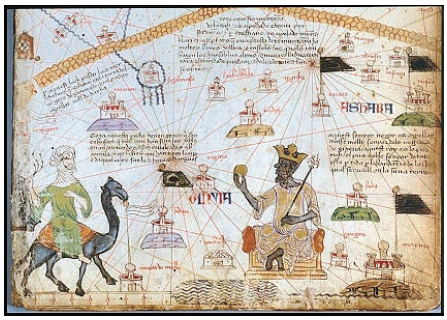

図 5

けた黒人王が地図上に置かれるが、キリスト教徒ではない。この人物は14世紀初めの西アフリカのマリの王マンサ・ムーサ Mansa Musa をモデルにしている。イスラム教を信仰し1324年にメッカにまで巡礼した君主でもある[16]。

アフリカのキリスト教布教には聖マタイが関わった。『使徒行伝外典』の第七書によればマタイはエチオピア王エグリプス Aeglippus を洗礼し、王はキリスト教徒となった。首都であるナダヴァー Naddaver に到着したとき、人々を支配していたのは魔術師とヘビだった。マタイは一人の宦官に迎えられた。先に聖ピリポが洗礼を施し、魔術師とヘビの呪文を解くことに成功していた人物である。聖マタイは王だけでなく、宮廷や国をも洗礼することになる。王位はその後、兄弟のヒルタクス Hyrtacus によって受け継がれるが、ヒルタクスはエグリプスの娘であるエフィゲニア Ephigenia と結婚しようとし、マタイはそれに反対したために殉教させられることになる[17]。『使徒行伝』で福音書記者ルカが書くのは、女王カンダケ Candace の宦官が、ガザ Gaza の支配者であるということだ。それはかつてソロモン王がエチオピアの女王に与えたとされる都市である。エチオピアでは自国の文化とアイデンティティの形成には批判的で、アフリカ人や黒人ということよりもイスラエル人であるという方向に向かったようだ[18]。

エチオピアははたして黒人の地であったのか。発端は人類の起源にまでさかのぼる。ノアは人類を3つのグループに分けた。ヤペテ、セム、ハムである。ヤペテは貴族社会、セムは聖職者、ハムは悪人と奴隷ということだ[19]。さらに中世のキリスト教神学者はハムをアフリカ、他の二人の息子をヨーロッパとアジアに結びつけた。アイルランド起源とされる700年代末のテキストでは、マギと結びつけて、三大陸をノアの3人の息子に分類する[20]。ハムが黒人であるという確証は1674年に歴史家・地理学者・神学者であったホルンが最終的に伝えた。ホルンはハムをアラビア、シリア、エジプト、アフリカに位置づけた。アフリカに置かれることでハムは「黒人」となった。肌の色についてはヤペテを白、ハムを黒、セムを黄とした[21]。しかしハムのアフリカでの主導権はエチオピアを含まない。この地はナイル川上流と理解され、アジアを基盤にしたセムの子孫と考えられた[22]。17世紀のある著作では「ネグロの黒について」と題した章で、ハムの黒い肌が議論されている。「太陽の焦げ跡、あるいはハムとその子孫への太陽の呪い」とあり、黒い肌を太陽のせいにしたものだ。「エチオピア人」と「黒焦げになった肌」の語呂合わせもなされている[23]。

ヘブライ語のエチオピアにあたる語クシュ（Kush・Cush）は、カナン Canaan の兄弟であるクシュ Chus の名と混同され、この二人の息子と父ハムはアフリカと結びつけられることになる[24]。クシ cushi という語は、本来クシュと呼ばれた地から来た人を指した。たぶん北アフリカのヌビアでエジプトの南に位置していた[25]。このクシ cushi の翻訳語は、民俗や地域に特定されないときでさえ、クシュ人、エチオピア人、ヌビア人が用いられる。たとえば『エレミア書』（13:23）は、日本語の新共同訳でも「クシュ人は皮膚を、豹はまだらの皮を変ええようか。それなら、悪に馴らされたお前たちも正しい者となりえよう」とし、口語訳聖書では「クシュ人」が「エチオ

ピアびと」に変えられている。タルムードの時代からヘブライ語の聖書の読者もまた、地域のちがいは意識せず、この語にそれが今日「黒人」と呼ばれる人たちを意味すると理解した。

黒人のマギ

三王礼拝に登場する三王はマギ、賢人としても知られる。古代ペルシャとメディアでのゾロアスター教の祭司であるマグス magus の複数形がマゴイ magoi で、それをラテン語化するとマギ magi となる。『マタイによる福音書』（2:1-12）には簡単な記述しかなく、特に人数は明示しない。新約聖書が書かれたギリシャ語では王ではなく、マギというスピリチュアルな賢人として解釈される。西暦 200 年頃テルトゥリアヌスはマギが賢人だけでなく王だったと、『詩篇』（71:10-11）を根拠に示した最初だ。旧約聖書に三王礼拝の論拠が求められる中で、『詩篇』の記述はマギの訪問の予型とされた。「エチオピアとタルシシュ人、アラビアの島々、シバ、メディアの人々、全地の統治者があなた、主の前に降りてきた」と記述される[26]。美術ではマギは 12 世紀までは十分に王には置き換えられなかった。贈物は西方教会では黄金、乳香、没薬だが、東方のキリスト教では 12 を数える。マギが 3 人だという最初の記述は、オリゲネスの 3 世紀初めの著作によるが、初期キリスト教のイメージでは、2 から 12 までの人物像が想定された。マタイ福音書に書かれた 3 つの贈物から賢人自身も 3 人が推定された[27]。4 世紀末に神学者たちは、マギのそれぞれはちがった国から来たと言いはじめた。三王は夢の中でヘロデ王を避けるよう警告され、異なったルートで母国へ帰ったとマタイは記述している。聖ヒエロニムスはペルシャに加えて、アルメニアとスキタイをあげている。5 世紀にはアウグスティヌスが三王を「最初の異邦人」と言っている。それは一つの限られた国や信仰がキリストを受け入れただけでなく、全世界がキリスト教化することを意味した。アウグスティヌスはさらにマギは東からだけでなく、西も北も南も、すべての方角から来たと考えた。13 世紀までに彼らの出身はペルシャ、インド、アラビア、地中海、ヌビア、シバなどさまざまに言われた。

三王の一人が黒人だと今日では考えられているが、最初からの話ではない。黒人のマギは西ヨーロッパでは 14 世紀までは出現していないが、15 世紀後半では一般的になった。しかし黒人のマギという概念は、8 世紀から 14 世紀まで、アイルランドとその文化的影響を受けたイギリスとドイツでは生き続けたようだ[28]。アイルランドとドイツの伝統ではその間の中年の王は例外なく黒人だ。1364-75 年に書かれたドイツのカルメル会修道士ヒルデスハイムのヨハネスの著述『三王物語』以降、テキストとイメージの大多数が若い黒人王となっていく[29]。ヨハネスは三王の一人が「黒人のエチオピア人」だったと述べた最初の著者の一人だ。『黄金伝説』や『人類救済の鏡』Speculum Humanae Salvationis などでは黒人王の言及はないが、ここでは、「カスパールは偉大な人物で、エチオピアの黒人であることに疑いはない」。「三王の出会い」Meeting of the Kings という主題は新しいもので、この書に由来し、エルサレムを取り巻く丘での三王の出会いを記述する。のちに「ゴルゴタの丘」となる場所だ。

図６

1360年代のジョン・マンデヴィルの『旅行記』では、「エチオピアは広大でエジプトまで続いている。二つに分割されていて南部と東部がある。南部はモーリタニア Mauritania と呼ばれ、東部の人たちよりも肌は黒い。……エチオピアにはサバ Saba の町があり、そこの王は主に供物を捧げた三王の一人だった」[30]。キリスト教的伝統は、イエスに贈物をもたらす賢人あるいはマゴイのうちに黒い肌を持った一人がいるという考えを受け入れた。そこでは黒い肌を持ったバルタザールが描かれる。ヨナ・ピンソンは、黒人王は中世末では確立したものとなり、「特にネーデルラントとドイツでは、黒と浅黒い肌の色は悪・罪・悪魔のシンボルとされた」ことを指摘する[31]。中世の注釈では「王たちはノアの息子たちの末裔だった」ことも指摘される。聖アウグスティヌスは、黒人王はハムの子孫と信じられ、地上の悪の都市に住んだと書く[32]。しかし15世紀の教会の方針を定めたノートからは、自動的には黒人を非難しなかったことが読み取れる。増大するオスマン帝国の脅威を前に、ローマにすべてのものを統合しようとして、エチオピアとコプトの教会に肯定的な態度を示したということだ[33]。

マギの一人を黒人にするのは、ポルトガルの西アフリカへの進出の直接の結果だとする説がある。しかしこの図像学はドイツのものでありポルトガルではない[34]。三王の遺骨は1158年にはミラノにあったが、1164年にはケルンに移され、そこで信仰の対象になった。1464年にはケルン大聖堂で壮大な催しがおこなわれている[35]。イタリアでは1343年のジョットー影響の一点［図6］に黒人女性が登場するが、三王は白人で3人の黒人女性を伴っていた[36]。ネーデルラントは1460–1500年の間、北ヨーロッパの美術の中心だったが、その中でマギの物語は流行の主題となっている。

三王の名前については7世紀末までは確定しない。中世のキリスト教圏で3人の名がバルタザール Balthasar、メルキオール Melchior、カスパール Caspar とされ、12世紀までに定番となった。失われたギリシャ世界の年代記に書かれた西暦500年頃のアレクサンドリアのテキストを、メロヴィング朝で翻訳した抄録が7世紀末か8世紀初めに登場し、のちの三王の名の原型をなす[37]。8世紀初めにマギは若者、中年、老年と記述されるが、名前との対応はない。8世紀のテキストではアイルランドの伝統を反映したベーダ・ヴェネラビリスが、老人をメルキオール、中年をバルタザール、若者をカスパールとした[38]。ベーダに帰属するテキストに次のようなフレーズがある。「主に贈物をしたマギがいる。最初はメルキオール、老いて灰色の長い髪、髭を蓄える。紫のチュニック、短い緑のマント、紫と白のスリッパ、さまざまな素材のミトラ（司教冠）をかぶる。神に黄金を捧げる。二番目はカスパール。髭はなく若者で、赤ら顔。緑のチュニック、短く赤いマント、紫のスリッパ、神にふさわしい捧げものとして芳香で神を讃える。三番目はバルタザール。ダークで、髭におおわれ、赤いチュニック、短く白いマント、緑のスリッパをはく。

没薬により人の子の死を予言する。彼らの衣服はすべてシリアの絹である」。このフレーズは12世紀とされたが、その後の研究では8世紀中頃までさかのぼるものだ[39]。

図7

ベーダに帰される著述に根ざしたアイルランドとドイツの伝統での中年の王バルタザールを黒人とする考えと対立するのが、先述のヒルデスハイムのヨハネスだった。彼にとって黒人はカスパールと呼ばれる第3の最も若い王だった[40]。三王の統治した地域は、メルキオールがアラビアとヌビアを、バルタザールがシバとゴドリアを、カスパールがタルシアとエグリセウイアだとされるが、現在のどこにあたるかを確定することは難しい[41]。13世紀の中頃、聖書注解に尽くしたドミニコ会修道士ユーグ・ド・サン・シェールは、三王の名前は踏襲したが、その祖先としてノアの三人の息子をあてた[42]。ハムは「不実」な祖先で、「正義」のカスパールに対立する。カスパールを「黒人」だとするのは、9世紀のセダティウス・スコトゥスにまでさかのぼる。

直接的に決定したわけではないが、間接的に三王の一人を黒人にするのに働いたものとして、「シバの女王」をあげることができる[43]。黒人王の絵画的源泉として、1181年にモザンの画家ヴェルダンのニコラスがクロスターノイブルク祭壇画に描いた黒人のシバの女王［図7］にあると指摘されている[44]。シバの女王が予型となる三王礼拝に隣り合って位置するが、三王はともに白人である。女王は黒人で表現されるが、ここで三王と結びつく。バルタザールを中年の黒人王とする伝統はアイルランド起源で、ドイツに道を開いた。ケルンはアイルランドへの伝道の中心地であり、さらに黒人のシバの女王表現の中心だった。黒人の女王は13世紀末のケルンの教会のステンドグラスで二度表現される。その一つは三王に捧げられたチャペル内にある[45]。シバの女王は、異教徒からキリスト教徒に改宗した姿であり、三王礼拝を象徴する。聖十字架伝説にも登場し、エルサレムに向かう道で通り過ぎた木の橋に秘められた本性を感じ取っている[46]。

シバの女王

シバの女王は謎めいているが、魅惑に満ちた女性で、出典によってさまざまに変容する。旧約聖書『列王記上』（10:1-13）ではシバ（シュバ）の女王と呼ばれ、ソロモン王を訪れたあと、シバの国に帰るところで聖書の記述はおわるが、その後のユダヤ教やイスラム教の原典では詳細が加えられる。エチオピア外のシバ伝説では二つの重要な要素がながらく不明なままだ。女王の名前とソロモンとの関係が結婚か内縁関係かという点である。シバの女王の名はさまざまで、ニコリス、マケダ、ビルキス、「南の女王」、カンダケ、リリトなどと呼ばれる[47]。アッシリアの歴史では紀元前824-810年に在位した王シャムシ・アダド5世の配偶者であるセミラミスSemiramisが引き合いに出される。このアッシリアの女王がデモーニックな背景を持つだけではなく、生活様式がシバの女王と似ていた。セミラミスは燃えるような女傑の戦士であり、ユーフラテス川の流

れをそらせたとまで言われる。シバの女王も伝説では馬を熟知する「使い手」connoisseur だった。セミラミスはネブカドネザルの妻だったともいう。11 世紀の『ベン・シラのアルファベット』によれば、ネブカドネザルはシバの女王の息子だったので、セミラミスは彼女の義理の娘ということになる[48]。

シバ Sheba は『創世記』では二カ所に現われる。セム（10:28）とアブラハム（25:3）の子孫としてである。これとは別にハム（10:7）の子孫としてセバという語が現われる。セバ Seba とサバ Saba はシバ Sheba に近い。サバはアラビアの国名で伝統的にシバと同一視された。それはまたエチオピアの首都の名で、ローマの歴史家フラウィウス・ヨセフスがギリシャ語で記述したものでもある。創世記の系図ではセバはクシュの息子としてのみ現われる。セバは再度シバの文脈で登場する。現代の学者たちはヨセフスが女王は誰で、シバはどこかをレポートしたのを見過ごしたようだ[49]。ヨセフスは『ユダヤ古代誌』で、ソロモンを訪れた女王を「エジプトとエチオピアを支配した女性」と言っている。そして名をニコリスとし、シバをヌビアのメロエ Meroë だとした。ただしエジプト史からみると、ソロモン統治下の時代、エジプトに女王はいない。シバとアラビアのサバの同一視は、聖書学者とアラビア学者の双方でみられる。南アラビアで活動する考古学者も同様だ。彼らは女王がアラビアのサバから来たと主張する。シバの女王が黒人だというのは、シバという地がアラビアの南西の先端に位置したことと、紅海を越えて東アフリカの黒人の諸国があったことが、混同されたためだとされる。ヨセフスはソロモンの訪問者をエチオピアの君主と同一視した。オリゲネスはそれをさらに『雅歌』の黒い花嫁と結びつけた[50]。12 世紀のキリスト教神学者ホノリウスの記述には、「南に向かってエチオピアがある。……そこにはシバの町があり、ソロモンのもとにやってきた、かの女王のいたところだ」とある。同時代のベネディクト派神学者ルペルトゥスは「エチオピアの黒人」を「ソロモンの英知を聞きつけて地の果てからシバの女王がやってきたようにキリスト教会に導かれる人々」と言う[51]。

エチオピアの古典的な年代記『諸王の栄光』ではシバの女王はエチオピアの女王マケダの名で記録される。ソロモンとの間に生まれた子はエチオピア王朝の原型となるものだ[52]。6–14 世紀にかけて書かれた同書は、エチオピア正教会の重要な文献だが、シバの女王を何の説明もなく美しい女王マケダと名付け、シバの国を古代エチオピアとみなしている。マケダはアレクサンダー大王のマケドニアと結びつけられることもあるが、マケダは女王カンダケのなまりだと言う見方もある[53]。女王マケダはエルサレムに旅行しソロモン王と愛をかわし、シバの国に戻り息子メネリク Menelik を生む。メネリクはエチオピアで育つが、22 歳のときエルサレムに旅して父に会う。ソロモン王は喜び、王の継承を願うが、息子はシバの国に帰る。父はイスラエルの息子たちを送り、「契約の箱」をエチオピアにもたらす。今日まで多くのエチオピア人は、この聖櫃が同地にあると信じている[54]。

『コーラン』での女王の説明は独立したものではなく、ユダヤの原典にもとづいている。イスラムの伝統ではシバの女王のアラビア名をビルキスとして、南アラビアのサバの女王と推定す

る。ビルキスという名は、10 世紀のイスラム法学者アル・タバリーが用いている。ビルキスはヨセフスが与えたニコリスの変形で、「性交」を意味するヘブライ語ピルゲスか、あるいは「内妻」を意味するピレゲスからくる[55]。シバの位置を確定するものとして、南アラビアのマリブで壮麗な円環の遺跡ビルキスの聖所が発見されている[56]。イスラムでは女王は魔的で否定的な光があてられ、女王は奇妙にもロバのひづめを持っているのだという。アラブのテキストではビルキスのほかにバルマカとも呼ばれる。アルマカはイエメンでは乙女ヴィーナスを意味する語である[57]。

現在は紅海をはさんでイエメンと向い合せになっているエチオピアは、また楽園の庭の場所とも名付けられ、人々は太陽と月を礼拝していた。それはユダヤ、イスラム、キリスト教の宗教的イメージでは、緑の場所であるエデンの園として登場するものだ。アラビアのサバは都市というより国で、南アラビアやインドからの貿易流通の拠点だった。ソロモンも南アラビアとインド洋での貿易をおこなった。女王の旅は商業を目的としたものだという解釈がある[58]。シバの地の経済は、農業とともにスパイスと宝石のキャラヴァン貿易に根ざしている。乳香と没薬がシバに富をもたらした。コーランと聖書はシバを金銀、宝石、象牙に満ちた広大な富の地と記述する[59]。

シバの女王はキリスト教圏にだけ属したわけではない。ユダヤ人、アラブ人、アッシリア人でもある[60]。『諸王の栄光』は別の重要な変化を示す。女王の毛深い脚やデーモンからの系譜については何も語らない。ヤツガシラの登場する話はシバのキャラヴァンの長であるタムリンの現実的な話に置き換えられている[61]。ソロモンとの大規模な貿易に携わった人物で、王の英知と力をよく知る人物だ。最も重要な潤色は女王が太陽信仰を捨てて、イスラエルの神を信仰する決断をすることだ。古い太陽信仰は、「神」の信仰に置き換えられ、敬虔なイスラム教の女性信者となっていく[62]。また『コーラン』（27:22-44）はソロモンを訪れるシバの女王の話を伝えるが、ここでも女王の太陽崇拝を記述するのが特徴的だ。いかにヤツガシラがソロモンからの手紙を伝えるか、女王の貴族たちとの相談やソロモンへの贈物などが語られる。もし王がこれらを受け取らないなら、策略で水たまりは磨かれた床になり、女王の脚をさらけ出してしまう。その結果、彼女はソロモンとともにアッラーに降伏し、イスラム教徒となる[63]。

シバの女王は『新約聖書』（マタイ 12:42, ルカ 11:31）では「南の女王」の名で登場する。「南の女王」は賢者の教化によって「真の宗教」である一神教に導かれた女性とみなされる。彼女は「土と月」を崇拝する異教の女司祭だった。コーランはシバの女王が太陽を信仰する自身の誤った態度に気づくようになったと伝える[64]。『諸王の栄光』で具体化したエチオピアの伝統は、『使徒言行録』（Acts 8:27）で語られるエチオピアの「女王カンダケ」をシバの女王と考え、異なった時代の二人の女王を混同してしまった。シバの女王の旧約聖書の物語は、キリスト教時代以前にすでにアビシニア（エチオピア）に達していた。南アラビアの移民がもたらしたものだ。エチオピアでのキリスト教の導入とともに、キリスト教の層がヘブライとセムの伝統に重ねられた[65]。ボードリアン図書館所蔵の写本は「南の女王の誕生地はアクスムである」と付け加えている。エチオピアにあたる古代アビシニアの首都のことである[66]。

中世のキリスト教図像学では、シバの女王は「聖十字架伝説」と結びつけて考えられている。シバの女王は十字架の超自然の力を持つ樹木を礼拝した最初の人物だ。アダムの子セツ Seth は天使ミカエルから生命の木の枝を受け取り、それをアダムの墓に植える。樹木はソロモンにより切り出され神殿に用いられる。樹木はサイズを変え、都市の外縁の橋にも使われた。シバの女王がこの町に入ったとき、橋の木にメシアの運命を認める[67]。ソロモンが神殿を建設しはじめる、木材を切り落とす。ソロモンは神殿の門にそれを礼拝のために置く。シビュラであるニコラ Nikaula は樹木にメシアを認め、それが引き起こす不安のためにシロアムの池のよどみに投げ込んだ。『ヨハネによる福音書』（9:5-7）には、この池が引き起こす奇蹟が書かれている。キリストの十字架がこの樹木からつくられたとき、異なった三色を示したと言われる[68]。12 世紀フランスの神学者ペトルス・コメストルは書いている。シバの女王はソロモンの宮殿で木の一部に気づき、帰国後この樹木の運命とそれがユダヤ人にとって意味する危険を手紙に書いた。ソロモンは樹木を葬った。樹木はキリストの受難のときになって川のよどみに見つけられる[69]。

伝説は展開し、サタンを思わせるデヴィルの名の一つであるサタナエル Satanael が、楽園に三本の木を植える。一本目はアダムのためのもので、その後ロトによってチグリス川で発見される。二本目はイヴのためで、モーセが「苦い水」の中で発見する。三本目は神のために植えられ、セツに代って天使ミカエルが発見する。神の木は生き残り、そこからキリストの十字架が切り出される。十字架伝説のヴァリエーションでは、神殿で樹木を見つけ、炎に燃やすセビラなる人物も登場する[70]。アダムが 930 歳のとき、妻と息子たちを集める。アダムの第 3 子セツは果実を求めて地上の楽園に行くことを願うが、アダムは慈悲のオイルを求め、セツに楽園への道を注意深く説明する。セツは天使ミカエルから、オイルは 5228 年後にしか手にすることはできないと聞く。キリストがアダムを地獄から開放し、洗礼をするときである。セツは全世界に広がる 4 つの流れの源泉をみる。源泉の上空にむき出しの木があり、突然成長し、新鮮で緑の葉をつける。広大な木の頂に子どもが座っている。神の子である。根本にはセツの兄弟アベルがいる。最後にミカエルはセツにアダムとイヴが罪に堕ちた木からリンゴの 3 つの種を与える。アダムが死んだとき口にそれらは植えられる。第一の種からはヒマラヤスギが、第二はイトスギ、第三からはマツが生える[71]。イトスギは父なる神、ヒマラヤスギは息子、マツは精霊を象徴する。アダムの墓の上で木々は成長し、モーセが到着するまでそこに留まる。

ある朝モーセは木々が立ち上がり、三位一体の名であいさつをするのをみる。モーセは死の直前、タボル山に枝を植える。ダヴィデ王がそれを見つけ、エルサレムに運ぶが、道すがら 3 人のエチオピア人、レプラ患者、隠者をその樹木で治療する。帰宅して王は若芽を井戸に置き、次の日に庭に植えようとするが、朝になると深く根を張ったため、井戸を拡張しなければならなかった[72]。「女王の足の癒し」というモチーフは、エチオピアとコプトの地域で発展した。レプラや隠者と同じくエチオピア人は彼らの黒という色も癒される。それはエチオピアを十字架の樹木という白人文化にシンボリックに統合するということで、言い換えればキリスト教化のメタファーと

なる。ランズベルクの『悦楽の園』で、パウロによるエチオピア人の洗礼が記される。同書ではレプラの浄化と罪や異教の浄化が、最後の審判にはたす意味が説明される[73]。

シバの女王は世界の宗教作品で登場し、その中にはヘブライの聖書とイスラムのコーランが含まれていた。英知の具現であり、キリスト教では聖十字架信仰の予言者でもあった。無数のヴァリエーションの中で、あるときはエチオピアの有徳の祖先であり、あるときは『イザヤ書』(34:14) で記述される誘惑者リリトであった[74]。ユダヤ伝説ではシバの女王は危険な女王リリトとして記載される。古代神話での戦士の女神であり、性的策略と信仰に挑む女性だった。エチオピア・ヴァージョンでは、基本的な雰囲気の変化がみられる。ときに強調されるのはソロモンの英知ではなく、シバの女王の高貴さにある。ときにソロモンは誘惑者リリトのたくらみを受け入れず、自身が誘惑者を演じ、策略でこの女王を手に入れようとする[75]。ときにシバの女王は独立した女性で、ソロモンによる支配よりも孤立を選んだ。ソロモンの神の奴隷となるよりも独立を選び、リリトのように自由を求めた[76]。リリトはアダムの第一の妻とされる。イヴはリリトが去ってのち、アダムに忠実にあるようにアダムの体の一部である肋骨の一本からつくられる。ヘブライ神話のカバラ的解釈によれば、シバの女王はリリトのようだった。ユング的な意味でシバの女王は卓越した日の出の女王だった。元型としての「日の出」は対立の統合を意味する。外面は女性で内面は男性、父であり母である、白であり黒であるというような[77]。

女王の容貌

イスラムの作家がさまざまな点で物語を補う。ソロモンの宮廷のデーモンは、王が女王ビルキスと結婚するのを怖れて、女王は毛深い脚とロバの足をもつという噂を流す[78]。アラビアの伝説では女王はデーモンから降りてきて、毛深い脚とヤギのひづめになった足をもつ。ソロモンと結婚するが、出身がどこかは語られない[79]。エチオピア伝説ではシバの女王はまたヘビの女王から生まれている。アマゾネスとして女王が水を渡る例もある。イタリア中部モンテジョルジオにあるアルベルト・ダ・フェラーラに帰される 1430 年の十字架伝説では、女王が馬に乗って水を渡っている[80]。女王が馬で橋に近づき、樹木を崇拝して再び馬でソロモンに向かっているアングロ・ノルマンの例もある。中世ヨーロッパでのシバの女王の水との関連は、そのデモーニックな足や脚と結びついている。具体的にはガチョウの足だという。レーヌ・ペドークは今日ではブルゴーニュワインの銘柄として知られるが、語源上の関連で言えば、「女王ガチョウ」reine Pédauque であり、このフランス語なまりがイタリア語での「足のガチョウ」piede d'oca と語呂合わせをなす。誤記による間違いがあって、ガチョウ anserinos とロバ asinos が置き換わったのではとも言われる[81]。シバの女王が、意識的にガチョウの足をもって表現されるのは、北ヨーロッパの固有のシンボリズムと関連している。ガチョウは神話で重要な役割を演じる。インドとエジプトでも天地創造は太陽に暖められたガチョウの卵からはじまる。エジプトの太陽神アモンはカルナックのガチョウとして表現された。ギリシャとローマでは犠牲としてガチョウを捧げた。ドイツ神話では

小びとと水や木の精はガチョウの足をもった[82]。

ガチョウの足をもつ女王は主にブルゴーニュとトゥールーズに現われる。1160年頃のディジョンのサン・ベニーニュ聖堂の西玄関の女性像は、モーセ、ソロモン、ペテロの右端に立っている。王冠をつけ、左足は毛深い動物の足のようにみえるところから、6世紀メロヴィング朝の女王クロチルドだと解釈された。その用心深さのゆえにアトリビュートとしてガチョウの足をもったかもしれないという。ディジョンのこの修道院の主な設立者の一人が西フランク王のロベール1世だが、血のつながりがあったベルタとの結婚は教会から祝福されなかった。二人の間の息子はガチョウの頭をもって生まれたと言われる[83]。その後この表玄関の人物像は、大足のベルタとあだ名されたシャルル・マーニュの母ベルトラーダと解される。クラブフットという内側に曲がった足の奇形で生まれ、ベルタという名の神話の女王をも連想させる[84]。そして最後にシバの女王と解釈されることになった。

図８

図９

13世紀、シャルトル大聖堂の聖アンナに捧げられた玄関ではシバの女王［図8］はソロモンの隣で、王冠をかぶっている。意識して衣服を引き上げているようにみえるが、一方の足はおおわれている。女王の足を覆い隠すのはしばしばみられる。ノートルダムの玄関では他の人物像は足首に達する衣服を着ているが、足がはっきりとみえるのと比較することができる。聖母マリアに捧げられたアミアン大聖堂では北玄関でシバの女王［図9］が、マリアの下、ソロモンの隣に置かれている。謙遜のシンボルとして手に王冠をもっている。誰も衣服の下で目だって盛り上がる足には気づかないが、衣服がロバのひづめになった足をおおっているからかと問われる[85]。15世紀からは糸紡ぎの輪は装飾としてガチョウの足をもったことが知られる。ドイツ語圏ではガチョウは来たるべき人が見つかる前兆、ブライダル・シンボリズムの役目をはたした。16世紀からは、川を歩いて渡ることで奇跡的にガチョウの足が人の足に変わるという原典が知られる。シバの女王が治癒のパワーをもっていたことは14世紀から知られていたが、エチオピアの『諸王の栄光』は、この詳細は含んでいない[86]。

シバの女王の『コーラン』での物語は、ソロモンに知らせをもたらすヤツガシラからはじまる。ヤツガシラは東方でキトールの町を見つけた[87]。そこは金銀と木々がエデンの園から流れてくる。支配をするのがシバの女王だった。ソロモンはヤツガシラの羽に手紙を結ぶよう命じる。ヤツガシラは荒野のキャンプで水を見つける仕事をする。神聖なものとみなされ、ペルシャでは美徳のシンボル。コーランでは賢明で美しい女王が支配する王国をソロモンに知らせる[88]。ヤツガシラの注意を引いたのは、神の代わりに太陽を崇拝する人々についてで、彼らの女王への絶対的服従だった。ソロモンはヤツガシラに手紙を託し、回答を待った。シバの女王は手紙を読んで、ソ

ロモンに贈物を送り、宮殿を訪れる。ヤツガシラが女王を記述する仕方が注目される。ソロモンのもとに戻って「私はそれらを所有する女性を見つけた。彼女はすべてのものを与えられ、偉大な王座を持っている」（27:23）と言う。このとき、彼女の王位を記述するのに用いたアラビア語 tamlikuhm は、何かを所有するを意味する mlk からくる。この語がソロモン自身を記述するときに用いた語と同じだという指摘がされている[89]。

ドイツの軍事技師コンラート・カイゼルが 1405 年に書いた写本『ベリフォルティス』には、黒人のシバの女王に捧げられた謎めいた文章がある[90]。宝珠と錫杖をもってアレクサンダー大王とカエサルの間で立っている。カイゼルは 1396 年のイスラムに対する十字軍での経験で、この黒人の女性支配者に出会った。イスラムのシバの女王は自由と改宗の女王よりも、軍事的側面を持つのだと確信した。王冠をつけた女性は黙示録の花嫁を示しているかもしれない。カイゼルのテキストは女王の官能性にも触れている。『雅歌』の要素は明らかで、黒の美しさや傷つけるようなまなざしを語る。しかしそこには黒が白に変化する可能性が語られる。

黒人の女王の視覚的イメージは、先述のヴェルダンのニコラスによってオーストリアの教会で最初に作品化され、その後 1200 年代のドイツで普及し、14 世紀まで持続した。このニコラスの黒人の女王［図 7］がその後の黒人例に影響した。クロスターノイブルク祭壇画では左翼パネル［図 10］の右下に位置し、女王は黒人だが、従者たちは白人である。祭壇画の他の画面と比べると、シバの女王の黒い顔は、特に目だってみえる。1175–1220 頃のカンタベリー大聖堂のステンドグラスは、白人のシバの女王［図 11］と黒人のラクダの御者を描く。シャルトルの北玄関に女王に従う黒人の従者が現れる。三王は隣接するタンパンに置かれている。1250–60 年頃のケルン大聖堂の三王のチャペルにあるステンドグラスは、マギに捧げた聖なる空間に黒人のシバの女王［図 12］を置いている[91]。1300 年代中頃シバの女王の物語は、ポピュラーなものとなり、1330 年頃の『貧者の聖書』では女王と二人の従者は、アフリカを思わせるものはないが、黒色か青色に描かれた[92]。しかし黒人の女王は例外的で、多くは白人だった。先述のカイゼルの『ベリフォルティス』では、シバの女王［図 13］を着飾った魅力的な黒人女性として描いている[93]。15 世紀コンラート・ヴィッツ［図 14］はシバの女王を白人女性として描いている[94]。ソロモン王も若々しく、初々しい男女の出会いが読み取れる。17 世紀には東洋系白人として描かれた例もある[95]。エ

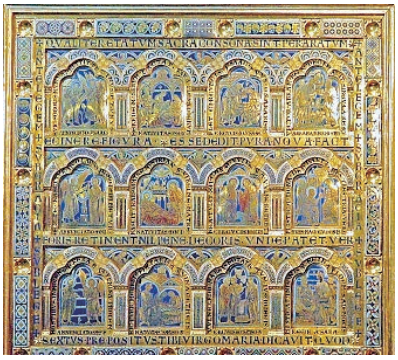

図 10

図 11

図 12

図 13

図 14

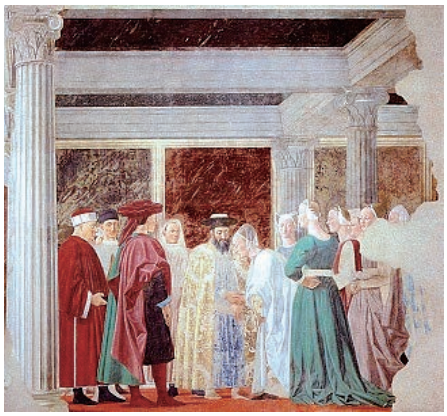

図 15

チオピアに残るフレスコ画では大きく目を開き槍を手にしてソロモンのもとに向かう馬上の勇ましい白人女性として描かれる[96]。十字架伝説ではどこでもシバの女王が黒人女性で描かれることはない。しかしピエロ・デラ・フランチェスカ［図 15］では、口ひげを蓄えたソロモン王との年齢差を感じさせるが、衣服には異国風のアフリカの民族色を加えている[97]。

シバの女王が黒人かアラブ系かという問題に注目した学者は、真実を求めてイエメンとエチオピアに行き発掘をした。そして女王はアラブだが、エチオピアの女王として君臨したという結論を得る[98]。エチオピアでの「シバの女王」のもつ含みは、自分たちをユダヤ人の子孫、選民、「契約の箱」の保護者、アブラハムになされた約束の継承者とする考えにもとづき、アフリカの他の地域の黒人とは異なったものとみなした[99]。ゲノムの研究はエチオピア人と非アフリカ人との交わりが 3000 年前にさかのぼるという。イスラエルのソロモン王との間に子どもをもうけたシバの女王伝説は原初のものとみなすことができる。聖書にもコーランにも書かれていることだ。エチオピアはアフリカの突端に位置し、アフリカからの出口の一つだった[100]。シバの女王はソロモンにスパイス、黄金、宝石を持参した。それから彼女は従者を伴って自国に帰った[101]。伝説はさらにソロモン王の時代から発展した経済的関係を示している。紅海からイエメンさらにはインドに続くものだ。そこで二つの文明がぶつかる。ギリシャ・ローマとインド・中国の交易を維持する地点だ[102]。シバの女王のソロモン王訪問は、乳香や没薬の有利な交易を維持する使命があったという見方がある。シバの女王の存在に具体的な証拠はないが、少なくともエチオピアの女性は大きな富と権力をもっていて、古代エチオピア社会で女性の地位の高さを反映した神話だ[103]。ソロモンと婚姻を結んだのなら、妻となった身でなぜ自国に戻るのかという素朴な疑問が残る。それは女性の自立を意味するものでもあって、伝説は女性が家庭や台所にいるという通念を覆すものだったようにもみえる。

奴隷貿易と黒人

1224-5 年に神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世は、多くのシシリアのイスラム教徒をアプリアノのルチェラに移動させ、自身に個人的に仕えさせた。イスラム文化圏は、フリードリヒが大衆

に印象付けたラクダや異国の動物の宝庫として機能した。ドイツのある僧侶が皇帝のニュルンベルクからの旅行を 1235 年 6 月に記述している。「多くの荷を伴う大行進。金銀、足糸、紫衣、宝石、高価な容器、ラクダ、ラバ、ヒトコブラクダなど。多くのサラセンとエチオピア人はエイプやヒョウを扱う珍しい技を持っていて、貨幣や財宝の運搬を警備する。多くの群衆を連れて皇子とその軍はヴィンプフェンに着いた」[104]。黒人の重要性を強調するもう一つの伝統は、特にケルンではなく、神聖ローマ帝国のドイツエリアと関係する。ホーエンシュタウフェン朝の図像学での黒人の役割は重要だ。フリードリヒ 2 世の黒人の侍従の記憶は、13 世紀末と 14 世紀初めには息づいており、1470 年代でもこの人物は記憶されていた[105]。フリードリヒの財宝に分類される黒人の侍従の印象的なイメージは、キリストに贈物をする黒人王に類似する。14 世紀初めにアフリカの黒人外交官が南フランスに到着した。1306 年に 30 人のエチオピアの外交使節がローマとアヴィニョンとボルドーを訪れ、ローマ教皇クレメンス 5 世に謁見した。これらの黒人のキリスト教徒は、イスラム教のエジプトを共通の敵としており、西洋の援助を必要とした[106]。1354 年ベリー公の父ジョン王はアラゴンの支配者から黒人を贈物として受け取り、ユーモアを交えてブラン Blanc（白）と名付けている。ベリー公もエチオピアの皇帝とコンタクトを取ろうと廷臣を派遣している[107]。

イスラムや北アフリカとの接触で言えば、イタリアよりもスペインで黒人は多かった。1382 年にアラゴン王はアフリカの青年を奴隷として自身の所有としている。北方では黒人の随行者は 1416 年頃のベリー公の時祷書［図 16］にはじめて現れる。最も若い王の背後に、王冠を手にする従者のグループの中にいて、頭には白いターバンを巻いている[108]。1402 年にエチオピアの大使一行がフィレンツェの商人アントニオ・バルトリに導かれて、ヴェネツィアに到着した。「インド地方の君主プレスター・ジョン」の代理と記述され、マジョール・コンシリオ（大評議会）に贈物を捧げている。彼らはフィレンツェの画家を含む職人グループをエチオピアに連れ帰る許可を得ている[109]。1404 年にローマを訪れたグループは次のように記録されている。「インドのエチオピア人の黒人が 3 人いる。彼らはキリスト教徒で……彼らの信仰を示すために、手にはすべすべとした輝く鉄製の十字架を持ち、衣服はフランチェスコ修道会のそれに似ている」。1441 年の公会議には、エチオピアのキリスト教徒の代表団が参加した。15 世紀初めの絵画では、一人のイヤリングをした黒人が何頭かの猟犬の手綱を手にしている。動物の飼育やトレーナーとしてのアフリカ人も登場する。黒いラクダに乗る黒人のドライバーもみられる[110]。

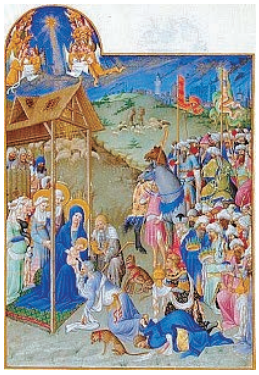
図 16

黒い肌は「呪われた」ものとみなされ、1441 年の奴隷貿易船以来、奴隷化の理由の一つとされた。このときポルトガルの船長は、サハラの西海岸で、二人の黒人奴隷の男女を手に入れ、航海王エンリケのもとに贈った[111]。1444 年 8 月にポルトガルのアルガルヴェの海岸にあるラゴス港に 250 人のアフリカ人奴隷が到着した。この港でポルトガル皇子は奴隷をポルトガル

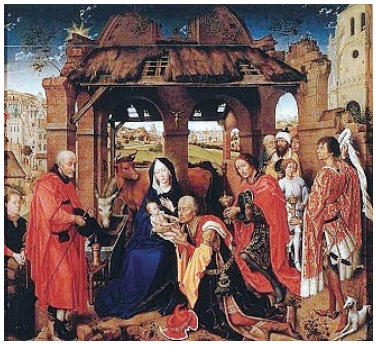

図 17

図 18

図 19

にもたらした指揮官を称賛し騎士の称号を与えている。15 世紀初めには黒人奴隷のヨーロッパへの流入は劇的に増加した。1400 年代の後半までに、黒人は南イタリアの奴隷の大多数を占めた。ポルトガルの奴隷市場は 1441 年から 1505 年までに 14-17 万人の黒人がとらえられヨーロッパで売られた[112]。ネーデルラントでは 1596 年 11 月ゼーランド地方南西部のミッデルブルクの港町に 100 人を超えるアフリカの男女と子どものグループが、はじめてやってきた。アフリカ人を見学する日がアナウンスされ、公衆は敬虔なクリスチャンであることを条件にアフリカ人を雇用した[113]。

ライン川以北で、アフリカ人のマギが現われはじめる。1441 年にヒエロニムス・ボスの叔父にあたるヤン・ファン・アーケンがプロデュースした演劇で、「ムーア人の」マギの衣装を描いたと記録されている[114]。同時代人のことばの理解では、この人物はたぶん黒人だ。当時のネーデルラント絵画での黒人王の登場から、このモチーフが徐々に馴染んできていることがわかる。黒人王はこの地域では 1460 年代以前は現われない。フランドルの図像学で支配的だったのは、中年の王は髭面のユダヤ人、若い王はエキゾチックではあるがアフリカ人の顔立ちではなかった。ネーデルラントの例では、1455 年頃ファン・デル・ウェイデンがコロンバ祭壇画の中央画面で見事な三王礼拝［図 17］を描くが、黒人王はみられない。このイコノグラフィーを下敷きにしながらドイツ生まれのハンス・メムリンク［図 18］が、1470-2 年に凛々しい立ち姿の若い王に代えて描いた、黒人のマギが衝撃を与える。イヤリングを付け、エキゾチックな衣装で着飾った、これも凛々しい顔立ちの青年である[115]。その後のボスの黒人王表現につながるものだ。イタリアではアンドレアス・マンテーニャの 1492 年 2 月に日付をもつ素描［図 19］が注目される。そこでのアフリカ人にほとんどの学者は気に留めない。ヨーロッパ美術でのユディトの召使をアフリカ人で描いた最初だ。ただ赤チョークの素描からは黒人であることは確定できないが、明らかにその特徴をとらえている。聖書でも他の典拠でもユディトの忠実な召使がアフリカ人だという記載はない[116]。

メムリンクのあとを受け、マッサイス［図 20］は生き生きとした肉と肌を描こうとする[117]。一番若い王はここでは黒い肌ではないが、鼻や唇から異国の顔立ちが読み取れる。ボスは全くちがった顔つきで黒人王［図 4］を描く。この表現では黒人のアフリカ人の顔立ちは、デューラー

図 20

図 21

図 22

図 23

が 1508 年に描いた素描［図 21］と対比をなしている[118]。黒人のアフリカ人は、16 世紀のネーデルラントでは兵士や音楽家やダンサーや召使などがいた。ポルトガルとスペインの商人がアフリカの黒人をネーデルラントやドイツにもたらした。デューラーはネーデルラント旅行でアントワープを何度か訪れ、1521 年には 20 歳の若いアフリカ女性［図 22］を描いている。アントワープに住むポルトガル商人のカテリーナという名の召使だった。1525 年にはヤン・モスタールトが、男性の黒人貴族の肖像［図 23］を描いている。ネーデルラントを統治したハプスブルク家のオーストリアのマルガレーテのもとにいた画家で、肖像はスペイン風の 16 世紀の衣装を身に着け、貴族の装いを示している。

黒のシンボリズム

古代の理解は黒色にいくつかの意味をもたらした。1）神話では世界の原初の状態と死の世界に結びつけられる。2）光に対する闇（skotos）、3）限界を超えた結果として燃え尽きた（flegein）という意味での黒。4）メランコリーに対応してメラノス（melanos）と定義された黒、の 4 点が指摘される[119]。サタンの色としての黒は 6 世紀から 11 世紀に出てくるが、黒は必ずしもサタンの独占物ではなかった。黒で描かれたさまざまな動物がいる。バジリスク、ドラゴン、オオカミ、ヘビ、ワタリガラス、ヴァンパイア、人狼などである。神聖ローマ皇帝ハインリヒ 3 世は「黒人」の名で呼ばれたが、それは身体的特徴からではなく、キリスト教会への攻撃のゆえだった。黒は悪で、教会の敵だった。ローマ教皇インノケンティウス 3 世は、1195 年に書いた冊子の中で、白を純潔のしるし、赤をキリストの血、黒を待ち望み・悔い改め・死・受難日のしるしとした[120]。

アフリカ黒人はオランダの文献では Swart、Neger、Moor と記述される[121]。英語での古語である blæc、blakaz、blac、black などとラテン語の flagro（焼く、燃やす）は、1300 年から肌の色に使われ、1504 年頃からはアフリカの「黒人」を記述するのに用いられた[122]。黒はキリスト教圏ではネガティヴな状態にあった。黒死病（1346-1350）の悲劇によってそれは加速される。中世を襲った悲劇と大量死は黒色を「罪」に対する罰と関連付けた[123]。「黒」を意味するギリシャ語メラノスとメラスは、比喩的には「死の神」タナトスを意味する悪意ある暗い性格をもち、病気

「うつ病」メライナと結びつく[124]。ヒポクラテスを受け継いだ中世と初期近代の体液理論によれば、人体の生理機能は4つの体液である黒胆汁・黄胆汁・粘液・血液の混合からなる。黒変した胆汁（melainé cholé）は毒とされ、メランコリア（melanchólie）という病気を引き起こす。すべての病気は胆汁嚢（cholódés）と関係する。身体の四体液は四大元素、および色彩の黒・黄・白・赤と対応した[125]。黒胆汁は体内に変化を起こし、アガメムノンの怒りのように、とりわけ外見が変化した。人体と外界とは相互関係がある。プラトンによれば悪い（カコス）肉体（ソマ）は悪い魂（プシケ）に導く[126]。乱れた精神は患者の外見に反映した。アガメムノンの胸は「黒」で満たされ、心は肉体的現われを変化させる否定的感情で満たされた。黒胆汁は秋か夏のおわりと関係し、メランコリックな人は、「毒に冒された人」とみられた。精神状態の調和を欠き、怖れや苦悩に見舞われた。10世紀ペルシャの哲学者イブン・スィーナーによれば、黒胆汁は悪魔の影響から色づけられ、「悪魔の水浴」に由来するものだ[127]。メランコリックは神や慈悲のない「食」の状態にある。12-13世紀までは黒胆汁は宗教的次元を獲得した。中世のメランコリックは「怠惰」acediaと呼ばれる魂の病いであり、「七つの大罪」の一つに数えられた。

ダークスキンは社会や道徳や宗教的秩序からはずれて世界の「知られざる場所」に住まねばならないことを示すものだった[128]。それは異教と罪ある生物の目にみえるしるしであり、無秩序、カオス、変則、不浄の状態の現われだった。古典期の著者のいくらかは、「ダーク」fuscus というラテン語を、エチオピア人を言うのに用いたが、「ブラック」niger ほどに明確なものではない[129]。このあいまいな語は三王中の黒人王を言うのに使われ続けるが、重要な変化が10世紀末か11世紀初めにアイルランドのコレクションに現われる。「三番目はバルタザール（パティザラ）という名で、ダークでブラック、髭におおわれ、赤いチュニックと、短い白いコートと緑のスリッパをはいている」。ブラックがダークのあとに付け加わる。二つの形容詞は髪よりも肌の色を言っている[130]。

黒は自動的に悪や異教と結びついたわけではない。東方教会との闘争や教皇権のもとでの統合への努力という点で、15世紀にはエチオピアやコプトの教会に肯定的な態度が示されていた。特に1441年、オスマン帝国の脅威を前にしたローマ教皇エウゲニウス4世がそうである。その点でイタリアやドイツでの聖マウリティウスの尊敬は重要だ。3世紀エジプトのテーベの聖人だが、その統率のもと兵士たちは異教の信仰を拒み続けた。セヴィリアのイシドールによれば、マウリティウスはギリシャ語でのマウロン（Mauron ＝黒）からくる[131]。ドイツではマグデブルク大聖堂の守護聖人であり、ハレでは彼とマグダラのマリアに捧げられた教会がある。バルドゥング［図24］（1507年ベルリン）とグリューネヴァルト［図25］（1521-4年ミュンヘン）の作品がよく知られるが、黒い肌の兵士の姿を取る。ともに銀色の甲冑を身につけ、影響関係を推定でき

図24

図25

るほど身体のポーズは類似している。

ソロモンの花嫁を考える中で、4 世紀スペインの司祭が発した質問、「黒人である彼女はどのように美しくありうるのか。あるいはもし彼女が黒人ならば美しくありうるだろうか」には、ある種のジレンマが含まれる[132]。それは神学上であると同時に美学上のジレンマでもある。「黒人は美しい」という宣言が聞かれるのに、ずいぶんと長い年月を要した。疑問とネガティヴな答えは何世紀もの西洋文学に現われる。中世でのアザーネス（他者）の表現は、イスラムと戦う数世紀間のロマンス語美学で問題となった。ラテン語では「私は黒くて美しい」fusca sum et decora とあり、聖ヒエロニムスのラテン語ウルガタでは、et の部分が sed となっていた。混乱があり、「彼女が美しいなら黒人であっていいのか」という問いが起こる[133]。「黒人であり美しい」では黒を美とつなぐ。「黒人なのに美しい」では黒を美から切り離す[134]。ソロモンの『雅歌』と聖書でのエチオピア人の重要性についての解釈は、ながらくヨーロッパ文学、ことに中世の恋愛抒情詩へ影響した。いくつかの聖書解釈では「黒い花嫁」は南の女王、シバの女王になる。それは芸術が魔術師で、イリュージョニストであり、黒を白に変えることができると言った 13 世紀の詩人のことばに対応する[135]。

3 世紀の神学者オリゲネスは、ソロモンのエロティックな物語をアレゴリカルに解釈する。この詩はソロモンがファラオの娘との結婚のために書かれた「祝婚歌」だという[136]。5 世紀の司祭テオドーレもまた、『雅歌』をソロモンがファラオの娘の一人に送った恋愛詩だとする[137]。つまり現実にいた女性に伝えた詩である。オリゲネスは彼女が黒人であることに二つの理由を用意した。その不明瞭な出身のために黒いのと、モーセのエチオピアの花嫁の典型であることから黒かった。『民数記』12 章は「モーセはクシの女をめとっていた」（12:1）からはじまる。異邦人の国家を示すエチオピアの女性が、精神的規範であるモーセと結婚する。12 世紀の詩人アダン・ド・サン・ヴィクトルは三王のミサの中で次のようなフレーズを歌っている。「ここに東方から女王がやってきた。ソロモンの神のような英知を、彼女は気づいている。彼女は黒人だが美しい。没薬と香料により黒くなる黒人の乙女」。ここでラテン語は「美しい」formosa と「黒」fumosa でリズムをなす[138]。

さらなる解釈が 12 世紀に生まれる。サン・ヴィクトルのユーグは寓意と文字通りの解釈を結びつけた[139]。詩中の愛される者は神に願う霊魂となる。そんな解釈は詩を敬虔な信者に近づけた。12 世紀はまた『雅歌』の翻訳を聖職者でない信者たちに注解をつけて口語訳にした。詩は聖職者の世界よりも広いサークルに知られた。愛された若い女性は「シュラムの女」Shulamite と名づけられている。エロティックなサラセンの女性エイジェンシーの肉体や衣装の細部が記述される。13-14 世紀に黒の意味にわずかな修正があった。オリゲネスの書いた『雅歌』（Verse 1, 5-6）の注釈が当時非常に重要なものになっていた。「私は黒いけれども美しい」のあとに続くフレーズで、私はブドウ園の見張りに立たされ、日に焼けて黒いのだと語る。「私は黒い（melaina）。だがエルサレムの娘たち……私を見るな。私は黒いから、太陽が私を見たから」[140]。アフリカのシ

バの女王などとの関連は、黒のネガティヴな意味を駆逐して、エキゾティシズムという別の次元を開いた[141]。

アフリカ人の黒い肌はヨーロッパ中世を通じて一般には醜いものとみなされた。14 世紀マルコポーロも黒人は悪魔のように醜いと書いている。しかしアフリカ人の顔つきについては、興味を持って十分な説明をしている。さらにインドの黒人については「彼らは黒くなればなるほど思慮深くなる」と記述する。15 世紀初めにイタリアの人文主義者ロレンツォ・ヴァッラは黒の色としての劣勢を見直して、「私の考えでは、エチオピア人は彼らがより黒いという理由で、インド人よりも美しい」と言った[142]。

ボスの黒人表現に至るまでの歴史的経緯をオランダの美術史家が適切にまとめている。ネーデルラントでの黒人は西暦 200 年から 500 年の間に登場する。ローマ軍の統治下にアフリカ黒人がやってきたときである。黒人のローマ人は軍の全ランクにみつかる。ローマ皇帝の何人かは、北アフリカ出身だった。その一人セウェリウスは 209 年に軍を率いてネーデルラント地方に来る。彼自身はアフリカ黒人ではなかったかもしれないが、イギリスでの軍の中には黒人のエチオピア人がいたことが知られる[143]。中世では宮廷での黒人の役割が確立する。8 世紀からは多くの黒人を含むムーア人やイスラム教徒がヨーロッパを征服する危機感があった。続く世紀ではムーア人がイベリア半島やシシリアやコルシカを越えてやってくる。これらのイメージは主にネガティヴなものだが、肯定的なものはエルサレムに住むキリスト教徒であるエチオピア人を十字軍が発見したことから起こる。エチオピアとヌビアはイスラム教と戦うキリスト教の王が支配した。ヨーロッパの十字軍や君主がこの二国に興味を持ち、そこではムーア人に抵抗する強い黒人のキリスト教徒がみられた。1416 年頃の『ベリー公のかくも豪華な時祷書』には、十字架の足もとにいる 3 人の黒人僧が描かれる。

「快楽の園」とシバの女王

ボスの『快楽の園』［図 26］の中央の池で目だったポーズをとる黒人女性を、シバの女王と結びつける研究者は多いが、それ以上の考察が進んでいるわけではない。これまで述べてきたシバの女王の表現の系譜をふまえて、試論を進めたいと思う。「快楽の園」にいる黒人女性を解釈するのに、いくつかのポイントがある。まず第 1 に白人と協調しながら違和感なく同居していると

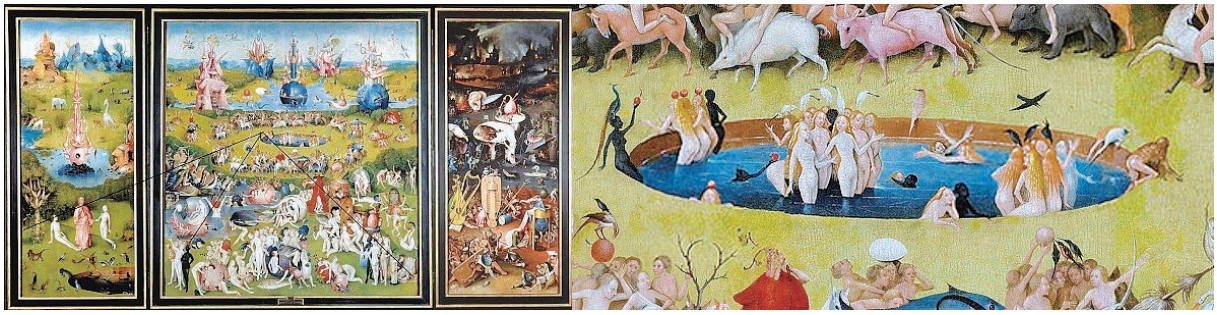

図 26

いう点。第2に中央パネルの快楽の園には、黒人女性が点在するが、右翼パネルの地獄には一人も描かれていない点。第3に中央の池でクジャクを頭にのせた黒人女性が、ことに目だった位置にある点などだ。これまで黒人女性にシバの女王を典型とみて、考察してきた。これをふまえると、この女性の姿に高貴な物腰を感じ取ることになり、この作品の主題と連動して、解釈のポイントがここにあるように思えてくる。

私はこれまでの研究で『快楽の園』における「視線の遊戯」として、構図分析を通して「隠されたシンボリズム」を見つけ出してきた。シバの女王を思わせるこの黒人女性についても、構図上重要な位置にいるのは確かだ。中央の池の回りを動物に乗って練り歩くのは、すべて男性であり、池で水浴するのは、すべて女性である。永遠の円環運動は、中心のウーマンパワーによって支えられている。シバの女王を思わせるこの女性はリンゴのような果実を手にするが、ここでエデンの園との関連でいうと、イヴの連想を伴っている。中央パネルには、前景に二人の黒人女性が立っているが、同じく頭にはリンゴをのせている［図28・32］。誘惑者としてのイヴのイメージは、すでにエデンの園にある。伏し目がちにアダムの視線をかわしているが、イヴにはアダムを誘う誘惑者の妖気が漂っている。これはイヴではなくて、リリトだという説があるが、アダムと同等を主張して、野にくだり悪魔と交わったとされる最初のアダムの妻である。そしてそれは同時にシバの女王の、自立的自我の独立とも同調するものであって、ボスがここで描き出したのは、魔的な女性に翻弄される男たちの姿であって、同時代に盛んに描かれたウーマンパワーの主題と共鳴しあっている。

ボスがいかに緻密に構図を決定したかを、私はこれまでいくつかの論文や著作で問題にしてきた。ここではさらに進んでこの黒人女性を中心に構図を見直してみる。左手で高らかに捧げもつリンゴはよくみると、光の効果のようにみえなくはないが、かじられたリンゴ［図27］と解することもできる。そばにはやはりリンゴを頭にのせた裸婦がいるが、光の反射が描かれていないことからも、このリンゴの意味は考察の対象になる。かじられたリンゴは1500年前後のエデンの園を描いた絵画にはしばしば登場する。ことにドイツのクラナッハは、歯形の残るリンゴまでも描いている。これはイヴがかじったものだとすれば、原罪を意味することになる。ヘビに誘惑されてイヴは禁断の果実を食う。美味かったのでアダムにすすめる。アダムが食おうとしたとき

図27

図28

天使が現われ、アダムはあわてて呑み込む。それが喉につかえてしまい、その後男性の喉はふくれたままになる。欧米語では喉仏のことを「アダムのリンゴ」と言う[144]。二個のリンゴがあり一方がかじられているという対比は、「快楽の園」でも描きこまれている。

図 29

左翼パネルのエデンの園で、リンゴを見つけるのは難しい。しかしよくみるとアダムの背後の木の奥に、二個のリンゴが転がっている［図 29］。ここでも手前のほうはかじられているようにみえる。中央パネルではリンゴはイチゴとともに頻出する。前景にいる二人の黒人女性はともに頭にリンゴをのせている。エデンに近いほうの黒人女性［図 28］は後ろ手にもう一つのリンゴを隠し持っていて、イヴの姿を彷彿とさせる。このグループと対称に位置するグループが地獄に近い側にいる。男が二人と女が一人だが、そこでも色あせたリンゴが二個登場する［図 30］。女が手にするリンゴはかじられていない。横に放り投げたほうがかじられているようにみえる。リンゴを指さす謎めいた手が、リンゴに注目するように指示を出している。このような読み取りを下敷きにして、それぞれのリンゴが置かれた位置に規則性がないかを観察していく。

図 30

これをはじめる前にボスの絵が、極めて考え抜かれた幾何学的構図法を用いているという前提が必要になるが、私はこれまで繰り返し指摘してきたのでここでは触れない[145]。今回はじめて見つけ出した点のみをまとめておく。快楽の池で捧げもつリンゴに視線をおくる人物が二人いる。一方はエデンの園のアダムで、生まれたばかりのイヴを見上げているようにみえるが、視線ははずれていて、快楽の園でシバの女王が捧げもつリンゴに向けられているように、私には思える［図 31］。このリンゴとアダムの目を直線で結び、延長すると、アダムの背後にあるリンゴに、

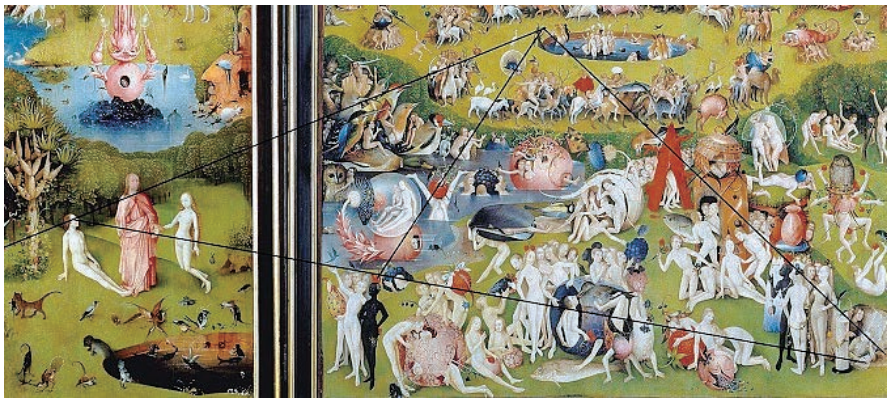

図 31

図 32

図 33

図 34

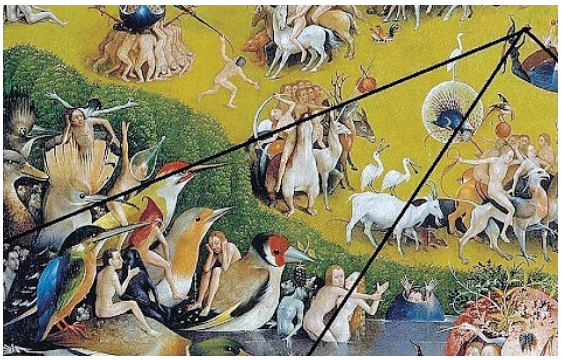

図 35

ぴったりとぶつかる。もう一方は二人いる頭にリンゴをのせた黒人女性の右側のほうで、顔と右手は遠景の池のこのリンゴに向けられているようだ［図 32］。ここでも遠景のリンゴを出発点に、頭上のリンゴを直線で結び、延長すると地獄の側のかじられて色あせたリンゴにぶつかる。さらにアダムに目を向ける前景左側の黒人女性の頭に乗ったリンゴをアダムの目と直線で結び延長すると、頬杖をつく女が手にするリンゴにぶつかることがわかる。最後は池で捧げもたれたリンゴをエデンに近い頭上のリンゴと直線で結んでみる。その線上にこの絵画で重要な二つのモチーフが置かれていることがわかる。一つは男性が無理やりに女性の手首を握り、引き寄せようとしている［図 33］。男女の上半身は直線と平行に走り、二者を分断しているようにみえる。もう一つは逆立ちをしてＹ字型の脚のポーズをとった男性で、股間を押さえている［図 34］。中心の池の黒人女性が中心的存在だとすると、それに向かってセクシャルなパワーも伴いながら収斂していくようすが読み取れる。そうすると中景左に群がる鳥たちの視線もまた、このシバの女王に向けられているように思えてくる［図 35］。そしてその中心にはソロモンからシバの女王に伝言をおくるヤツガシラが女王を見つめているのである。羽冠を特徴としたエジプトからインドにかけて生息する珍しい鳥である[146]。もちろんシバの女王の足でもあったガチョウもそこには描かれている。

黒のシンボリズムをふまえて考えれば、シバの女王を彷彿とさせるこの黒人女性に、否定的な意味は見いだしがたく、魅惑的な美の誕生を認めることになるだろう。それは黒胆汁としてのネガティヴな気質が、メランコリアという病いを引き起こしながらも、それが芸術家の気質として重視されはじめる時代の流れに対応したものだ。ボスはこの黒を「フクロウ」と同じように両義性をもった魅惑的な存在として、ここに位置づけたのだろうと思われる。

参考文献

・Adamu, Mamman Musa, “The Legend of Queen Sheba, the Solomonic Dynasty and Ethiopian History: An Analysis.” *African Research Review*. Vol. 3 (1), 2009, pp.468-482.

・Baert, Barbara, The Wood, The Water, and the Foot, or how the Queen of Sheba met up with the True Cross. With emphasis on the Northern European Iconography, in “*Mitteilungen für Anthropologie und Religiongeschichte*（MARG), 16, Münster, 2004, pp.217-278.

・Buttner, Nils, No Flesh In The Garden of Earthly Delichts: On the Paintings of Hieronymus Bosch, In: Ensslin, Felix ; Klink,

Charlotte (Hrsgg.): *Aesthetics of the Flesh*. Berlin 2014.
・Caillé, Jacques, "Le Commerce Anglais avec le Maroc Pendant la Seconde Moitié du 16eme Siècle", in *Revue Africaine* 84, (1940).
・Chastel, André, 1939, La légende de la Reine de Saba, Paris, *Revue de l'Histoire des Religions*, tome CXIX, 1939, pp.204-225; tome CXX, pp.27-44 et pp.160-174.
・Chastel, André, 1949, La rencontre de Salomon et de la Reine de Saba, *Gazette des Beaux-Arts*, vol. XXXV, pp.99-114.
・Coltri, Marzia, The Challenge of the Queen of Sheba: The Hidden Matriarchy in the Ancient East, http://www.cesnur.org/2011/dan-coltri.pdf
・Earle, T.F., K.J.P. Lowe, *Black Africans in Renaissance Europe*, Cambridge University Press, 2005.
・Green, Elliott A., The Queen of Sheba: A Queen of Egypt and Ethiopia?, *The Jewish Bible Quarterly*, Vol. 29, No. 3, 2001. pp.151-55.
・Hasan, Abla, The Queen of Sheba: Would rethinking the Quranic story support female public leadership in Islam?, Analize-*Journal of Gender and Feminist Studies*, New Series, Issue No. 7/ 2016, pp.90-6.
・Hitchins, S. G., *Art as History, History as Art: Jheronimus Bosch and Pieter Bruegel the Elder. Assembling knowledge not setting puzzles*. Brepols, 2014.
・Hondius, Dienke, Black Africans in Seventeenth-Century Amsterdam, *Renaissance and Reformation* 31.2, Spring 2008.
・Hrabovsky, Milan, The Concept of "Blackness" in Theories of Race, *Asian and African Studies*, Volume 22, Number 1, 2013.
・Kaplan, H.D., *The Rise of the Black Magus in Western Art*, Ann Arbor, 1987.
・Kribus, Bar, Where Is the Land of Sheba—Arabia or Africa?, *Biblical Archaeology Review*, September/October 2016.
・Monges, Miriam Ma'at-Ka-Re, The Queen of Sheba and Solomon, Exploring the Shebanization of Knowledge, *Journal of Black Studies*, Vol. 33, No. 2, 13th Cheikh Anta Diop Conference Selected Proceedings (Nov., 2002), pp. 235-246.
・Pinson, Yona, Connotations of Sin and Heresy in the Figure of the Black King in Some Northern Renaissance Adorations, *Artibus et Historiae*, Vol. 17, No. 34 (1996), pp.159-175.
・Rozen, Betty Sigler, Abraham Melamed, *The Image of the Black in Jewish Culture: A History of the Other*, Routledge Curzon: New York, 2003.
・Sammern, Romana, Red, White and Black: Colors of Beauty, Tints of Health and Cosmetic Materials in Early Modern English Art Writing, *Early Science and Medicine* 20 (2015) pp.397-427.
・Saunders, C.M., *A Social History of Black Slaves and Freemen in Portugal, 1441-1555*, Cambridge University Press, 1982.
・Schreuder, Esther, *Painted Black in Europe: the first introduction/Zwart, verbeeld: de eerste kennismaking*, August 31, 2011.
・Shitomi Yuzo, 蔀勇造『シェバの女王』山川出版社 2006.
・Soykurt, Mustafa, *Image of the "Turk" in Italy: a history of the "other" in early modern Europe: 1453-1683*, Berlin: K. Schwarz, 2001.
・Takashina Erika, 高階絵里加「〈東方三博士の礼拝〉図像における異邦人表現」人文學報（京都大学）100 号 , 2011, pp.13-32.
・Ullendorff, Edward, The Queen of Sheba, *Bulletin of the John Rylands Library* 45 (2), 1963, pp.486-504.
・Ungerer, Gustav, *The Mediterranean Apprenticeship of British Slavery*, Madrid: Editorial Verbum, 2008.
・Valbuena, Olga L., Review: The Mediterranean Apprenticeship of British Slavery, *Medieval & Renaissance Drama in England*, Vol. 24 (2011), pp.181-184.
・Weever, Jacqueline de, *Sheba's Daughters: Whitening and Demonizing the Saracen Woman in Medieval French Epic*, Routledge, 2013.
・Willan, T.S., *Studies in Elizabethan Foreign Trade*, Manchester University Press, 1959.

http://menadoc.bibliothek.uni-halle.de/iud/content/pageview/364840
http://www.lessonfromthepast.com/?p=615
http://www.scribd.com/doc/28017565/The-Elizabethan-Bridewell-Hospital-Minute-Books-Duncan 7.26.2010.
https://blackcentraleurope.com/sources/1000-1500/
https://estherschreuder.wordpress.com/2011/08/31/zwart-verbeeld-de-eerste-kennismaking/

注

1 Geertgen tot St. Jans, The Adoration of the Magi, (1480-1485), Rijksmuseum Amsterdam. Gerard David, Adoration of the Kings Altarpiece, Bruges (1515), National Gallery, London.
2 Kaplan, p.113.

3 Gombrich, “The Evidence of Images,” in *Interpretation: Theory and Practice*, ed. Charles Singleton（Baltimore:Johns Hopkins University Press, 1969）, pp.35–104. マリイニッセンは批判的に，なぜそれがヘロデ王かを説明するのが最初だとする．Roger H. Marijnissen（ed.）, *Hieronymus Bosch: The Complete Works*, Mercatorfonds, 2007, pp.239–40.

4 Lotte Brand Philip, The Prado Epiphany by Jerome Bosch, *The Art Bulletin*, vol. XXXV, nr. 4, December 1953, pp.267–293.

5 Hitchins, p.44. Jeanne van Waadenoijen, *De ‘geheimtaal’ van Jheronimus Bosch, Een interpretatie van zijn werk*, Hilversum 2007, p.50. では，David と Abner の予型について，「貧者の聖書」からの引用がみられる．

6 Kaplan, p.43 and note137. “rex et princeps Balthasar”.

7 Hermann Dollmayr, Hieronymus Bosch und die Darstellung der vier letzten Dinge, *Jahrbuch der kunsthistorischen Sammlungen des Allerhöchsten Kaiserhauses*, Bd. 19, 1898, SS.284–343. Maurice Gossart, *Jérôme Bosch: le “faizeur de Dyables” de Bois-le-Duc peinture de Diableries à la fin du Moyen-Age*, Imprimerie centrale du nord, 1907.

8 Buttner, S.273. たとえば，Jacques Lacan, Le stade du miroir. Theorie d’un moment structurant et genetique de la constitution de la realite, *Écrits* vol.1（Paris: Seuil, 1966）, pp.89–97.

9 Hitchins, p.148. 快楽の園の制作年決定には，その他 Hendrik III of Nassau と Françoise-Louise of Savoye の 1503 年の結婚，1498 年以降に Louis XII が採用したヤマアラシのエンブレム，1510 年以降のパノラマ的な世界像の様式などがあげられている．

10 Ungerer, p.179.

11 Valbuena ,p.181.

12 Kaplan, p.48.

13 Adamu, p.475.

14 Kaplan, p.83.

15 Kaplan, p.61.

16 Kaplan, p.56.

17 Ullendorff, p.490.

18 Adamu, p.478.

19 Hrabovsky, p.75. Japhet=Ιαφεθ =Iáfeth，Shem=Σημ =Sém，Ham= Χαμ =Cham.

20 Kaplan, p.31.

21 Hrabovsky, p.75. Hornius Georgius（George Horn）, *Arca Noae, sive Historia Imperiorium et Regnorum*. 白（albus），黒（nigros），黄（flavus）.

22 Kaplan, p.82.

23 Hrabovsky, p.76. Sir Thomas Brown, *Pseudodoxia Epidemica*（1646）の第 6 書による．Aethiops=Ethiopian=αιθειν+οψ=aithein+ops=黒焦げになった＋肌.

24 Kaplan, p.31.

25 Rozan, p.VIII.

26 Kaplan, p.25. Dawson William Carr, *Andrea Mantegna: The Adoration of the Magi*, Getty Publications, 1997 , p.53.

27 Kaplan, p.21.

28 Kaplan, p.27.

29 Kaplan, p.16. Johannes de Hildesheim, *Historia Trium Regum*, 1364–75.

30 Kaplan, p.19.

31 Pinson, pp.159–175.

32 City of God Book XV–20.　アウグスティヌス『神の国（四）』服部・藤本訳　岩波文庫.

33 Hitchins, p.44.

34 Kaplan, p.105.

35 Pinson, p.160.

36 Italian, Neapolitan Follower of Giotto, Adoration of the Magi with Three Black Women, Italy（ca.1340–43）, The Metropolitan Museum of Art, Robert Lehman Collection.　http://medievalpoc.tumblr.com/search/1300s

37 *Excepta Latina Barbari*. ビティザレア Bithisarea，メリキオール Melichior，ガタスパ Gathaspa として登場する．

38 Kaplan, p.21. Sanctus Beda Venerabilis（673?–735）. *Bedae Collectanea et Flores, Colon, Agrip*.1612, 8vols, fol.vol.3. John Mitchell Kemble, *The Poetry of the Codex Vercellensis*, 6–1, Aelfric Society, 1843, p.332.

39 Kaplan, p.26. Jacques Paul Migne. *Patrologiae Cursus Completus*. Series Latina. による．

40 Kaplan, p.63. Jaspar=Caspar.

41 Kaplan, p.64. Sheba, Godolia, Tharsis, Egriseuia.
42 Baert, p.274. Barbara Baert, A Heritage of Holy Wood: The Legend Of The True Cross In *Text And Image*, BRILL, 2004, p.341. Hugues de Saint-Cher (1190?-1263), Sedatius Scottus.
43 Kaplan, p.41. Queen of Sheba. シェバの女王とするのが正しいが，ここでは慣例に従う.
44 Kaplan, p.37. 最初の指摘はルイ・レオーによる．Nicholas of Verdun, Klosterneuburg Altarpiece.
45 Kaplan, p.67.
46 Pinson, p.171.
47 Coltri, p.3. Nikaulis, Makeda, Bilquis, Queen of the South=Regina austri, Candace, Lilith.
48 Baert, p.257. Alphabeticum Siracidis.
49 Green, p.152.
50 Kaplan, p.37.
51 Kaplan, p.38. Honorius Augustodunensis (1080-1154), Rupert of Deutz (1070?-1129?).
52 Green, p.153. Kebra Nagast, Makeda.
53 Ullendorff, p.500. Makeda=Candace (Kandake).
54 Ark of the Covenant. Church of Maryam Tsion in Aksum, Ethiopia. に隣接する Chapel of the Tablet にある.
55 Green, p.154. Al-Tabari (839-923). pilgesh・pilegesh=Bilqis・Bilkis・Balkis.
56 Ullendorff, p.489.
57 Baert, p.254. Balmaqua=Almaqua.
58 Green, p.152.
59 Coltri, p.2.
60 Baert, p.250.
61 Ullendorff, p.497. Tamrin.
62 Baert, p.255. Wallis Budge, E.A., *The Queen of Sheba and Her Only Son Menyelek: aka Kebra Nagast* (*The Glory of the Kings*), Ontario 2000, p.137.
63 Ullendorff, p.493.『コーラン（中）』井筒俊彦訳　岩波文庫　2004 pp.230-3.
64 Coltri, p.6.
65 Ullendorff, p.489.
66 Ullendorff, p.490. Aksum, Abyssinia.
67 Baert, p.221.
68 Baert, p.224.
69 Baert, p.222. Petrus Comestor (ca. 1100-1179).
70 Baert, p.234. Sebila.
71 Baert, p.236-7. Cedar, Cyprus, a pine tree.
72 Baert, p.237.
73 Baert, p.268. Herrad of Landsberg, *Hortus deliciarum*, fol.199, fol.238v.
74 Ullendorff, p.486. Lilith（リリト，リリス）.
75 Ullendorff, p.497.
76 Coltri, p.7.
77 Coltri, p.8.
78 Ullendorff, p.493.
79 Adamu, p.469.
80 Baert, p.259. fig.17. Montegiorgio (1430, attributed to Alberto da Ferrara).
81 Baert, p.262.
82 Baert, p.265.
83 Baert, p.260. Saint Bénigne in Dijon (c. 1160). Queen Clothilde, Robert the Capetian (866-923), Bertha.
84 Bertrada of Laon (710/ 727-783), Bertha Broadfoot, clubfoot.
85 Baert, p.261. Notre Dame at Chartres (1200-1220), Notre Dame in Amiens (1220-1236).
86 Baert, pp.266-7.
87 Ullendorff, p.496. Qitor. ヤツガシラは英名 hoopoe，学名 Upupa epops，日本では八頭，漢名は戴勝.
88 Coltri, p.5.
89 Hasan, p.90-1.

90 Baert, p.275. Konrad Keyser, *Bellifortis*, 1405.「私は美しく純潔だ．ここに一人の芸術家が生み出した私の彫像が立っている．若い男は私のイメージの中に自分たちが望むものを見るかもしれない．もし内気なあなたが彼女のまなざしに傷つくなら，その時彼女も蛇腹の後ろに隠れ，黒を空気で吹き出すだろう．彼女は戻ると，その肌の色はそれが以前あったものに戻るだろう」.

91 Kaplan, p.40. 黒人の女王の 13 世紀の例は 1270 年頃のストラスブールや 1295 年頃のケルンの教会にもあるが，三王との関係ははっきりとはしない.

92 Kaplan, p.71. *Biblia Pauperum*.

93 The Queen of Sheba. the Medieval manuscript *Bellifortis* by Conrad Kyeser and dates to c. 1405.

94 The Queen of Sheba before Solomon, Konrad Witz 1437. Gemaldegalerie, Berlin.

95 Queen of Sheba attributed to Sadiqi Beg, the superintendent of the library of the great Safavid ruler Shah Abbas I (reigned 1587–1629). British Museum.

96 An Ethiopian fresco of the Queen of Sheba travelling to Solomon.

97 Baert, p.278. Piero della Francesca, Adoration of the Holy Wood and the Meeting of Solomon and the Queen of Sheba, Basilica di San Francesco, Arezzo.

98 Adamu, p.473.

99 Adamu, p.474.

100 http://www.lessonfromthepast.com/?p=615

101 Ullendorff, p.487.

102 Ullendorff, p.478.

103 Ullendorff, p.479.

104 Kaplan, p.10.

105 Kaplan, p.67. fig.10.

106 Kaplan, p.12.

107 Kaplan, p.15.

108 Kaplan, p.15. Limbourg brothers, les très riches heures du duc de berry, c. 1416, Musée Condé Chantilly, L'Adoration des mages, Folio 52r.

109 Kaplan, p.12.

110 Kaplan, p.13. Jacobello del Fiore による作品.

111 Hrabovsky, p.66 and p.74. 船長は Antaö Gonçalvez，航海王は Henry the Navigator（1394–1460）.

112 Kaplan, p.105. これらの奴隷の多くはマギの従者としてピサネッロやデューラーのモデルとなり，不幸なアフリカ人の素描が描かれた.

113 Hondius, p.88. Middelburg（Zeeland）.

114 Kaplan, p.100. Jan van Aken.

115 Rogier van der Weyden, Saint Columba Altarpiece, c.1455, Alte Pinakothek, Munich. Hans Memling, Triptych of the Adoration of the Magi 1470–1472, Museo del Prado Madrid. プラド美術館にはメムリンクに先立って黒人王を用いたコロンバ祭壇画のフリーコピー（1460–70 年頃）が所蔵されている.

116 Earle, p.127. ここでは，この人物は何に由来するのか．Hohenstaufen 皇帝の時代にアフロ・ヨーロピアンの召使がポピュラーになりはじめていたことと関係するのかと問いかけられている.

117 Quentin Massys, The Adoration of the Magi, 1526, Metropolitan Museum of Art, New York.

118 Buttner, p.285.

119 Hrabovsky, p.71.

120 Hrabovsky, p.72. Henry III（1017–1056）, Pope Innocent III（1161–1216）.

121 Hondius, p.89.

122 Hrabovsky, p.69.

123 Hrabovsky, p.74.

124 Hrabovsky, p.69. melanós（*μελαν ὸ ς*）, mélais（*μ ἐ λαις*）, Thanatos（*Θ ἀ νατος*）, melaina（*M ἐ λαινα*）.

125 Sammern, p.402.

126 Hrabovsky, p.70. カコス（*κακος* – kakos），ソマ（*σωμα* – sóma），プシケ（*ψυχη* – psyché）.

127 Hrabovsky, p.74. and note53. “balneum diabolic”. Ibn Sīnā, Avicenna（c.980–1037）.

128 Hrabovsky, p.73. “terra incognita”.

129 Kaplan, p.27.

130 Kaplan, p.28. Patizara.
131 Pinson, p.171 and note80. ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説 3』前田・西井訳　1986　p.459.
132 Weever, p.XI. Gregory of Elvira（c.320–392）によるもの.
133 Weever, p.XII.
134 Weever, p.XV. Nigra sum et Formosa と Nigra sum sed Formosa の比較.
135 Geoffrey of Vinsauf, *Poetria nova.* による.
136 Weever, p.XIII. Origines Adamantius of Alexandria（c.185–255）, “epithalamium”.
137 Weever, p.XIV. Theodore of Antioch（c.350–428）.
138 Baert, p.274. Adam de Saint-Victor（–1146）.
139 Weever. p.XVI. Hugh of St.Victor（1096–1141）.
140 Hrabovsky, p.73.
141 日本語訳でも少しニュアンスの異なる訳がみられる．新共同訳では，「1:5 エルサレムのおとめたちよ／わたしは黒いけれども愛らしい．ケダルの天幕，ソロモンの幕屋のように．1:6 どうぞ，そんなに見ないでください／日焼けして黒くなったわたしを．兄弟たちに叱られて／ぶどう畑の見張りをさせられたのです．自分の畑は見張りもできないで」．口語訳では，「1:5 エルサレムの娘たちよ，わたしは黒いけれども美しい．ケダルの天幕のように，ソロモンのとばりのように．1:6 わたしが日に焼けているがために，日がわたしを焼いたがために，わたしを見つめてはならない．わが母の子らは怒って，わたしにぶどう園を守らせた．しかし，わたしは自分のぶどう園を守らなかった」．
142 Kaplan, p.81 and note71. Lorenzo Valla（1407–57）.
143 Schreuder, Esther. Septimius Severus（145–211）.
https://estherschreuder.wordpress.com/2011/08/31/zwart-verbeeld-de-eerste-kennismaking/
144 拙稿「アダムのリンゴ：男性の喉仏の絵画表現をめぐって 」倉敷芸術科学大学紀要 19 2014. pp.3–14.
145 拙著『「快楽の園」－ボスが描いた天国と地獄』新人物往来社（ビジュアル選書）2012,『快楽の園を読む：ヒエロニムス・ボスの図像学』講談社学術文庫　2017.
146 Shitomi 蔀，p.62.

図版典拠

［図 1］http://boschproject.org/#/artworks/The_Adoration_of_the_Magi_Prado
［図 2］https://en.wikipedia.org/wiki/Adoration_of_the_Kings_(David,_London)#/media/File:Gerard_David_-_Adoration_of_the_Kings_-_Google_Art_Project.jpg
［図 3］https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Geertgen_tot_St._Jans_-_De_aanbidding_van_de_koningen_-_Rijksmuseum_SK-A-2150.jpg
［図 4］http://boschproject.org/#/artworks/The_Adoration_of_the_Magi_Prado
［図 5］https://www.kwasikonadu.info/blog/2018/3/18/the-trans-saharan-trade-network-according-to-the-catalan-atlas
［図 6］http://medievalpoc.tumblr.com/post/68582099400/follower-of-giotto-neapolitan-school-the
［図 7］https://www.trendsmap.com/twitter/tweet/1020703201614548992
［図 8］https://en.wikipedia.org/wiki/Chartres_Cathedral#/media/File:Chartres2006_076.jpg
［図 9］https://www.periodpaper.com/products/1937-queen-sheba-king-solomon-sculpture-amiens-bible-original-photogravure-076256-ch2-044
［図 10］https://www.meisterdrucke.com/kunstdrucke/Nicholas-of-Verdun/263950/Der-Verdun-Altar-mit-biblischen-Szenen,-1181-(Champleve-Emaillewerk)-(linkes-Bild)-(siehe-146820-146822).html
［図 11］http://www.investingbb.com/black-king-solomon.html
［図 12］https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/4/4f/K%C3%B6ln_Dom_J%C3%BCngeres_Bibelfenster85.JPG
［図 13］https://cs.wikipedia.org/wiki/Kr%C3%A1lovna_ze_S%C3%A1by#/media/File:BlackSheba-Text.jpg
［図 14］https://eu.art.com/products/p33916234065-sa-i9268016/konrad-witz-the-queen-of-sheba-before-king-solomon-c-1435-37.htm
［図 15］https://cs.m.wikipedia.org/wiki/Soubor:Piero_della_Francesca-_Legend_of_the_True_Cross_-_the_Queen_of_Sheba_Meeting_with_Solomon.JPG
［図 16］https://fr.wikipedia.org/wiki/Fichier:Folio_52r_-_The_Adoration_of_the_Magi.jpg
［図 17］https://fr.wikipedia.org/wiki/Fichier:Rogier_van_der_Weyden_009.jpg
［図 18］https://www.museodelprado.es/en/the-collection/art-work/triptych-of-the-adoration-of-the-magi/0efd3706-0f54-4a23-87e3-dc8cd930e85a

［図 19］https://www.meisterdrucke.uk/fine-art-prints/Andrea-Mantegna/384468/Judith-with-the-head-of-Holofernes.html
［図 20］https://www.metmuseum.org/art/collection/search/436984
［図 21–22］http://surprisedbytime.blogspot.com/2012/12/africans-in-renaissance-europe-1.html
［図 23］https://fr.m.wikipedia.org/wiki/Fichier:African_man_portrait_Mostaert.jpg
［図 24］https://www.akg-images.co.uk/archive/Der-Heilige-Mauritius-2UMEBMY3BVUZX.html
［図 25］https://www.sammlung.pinakothek.de/en/artist/matthias-gruenewald-mathis-gothart-nithart/die-hll-erasmus-und-mauritius
［図 26–36］http://boschproject.org/#/artworks/The_Garden_of_Earthly_Delights

The Symbolism of the Black (2) : Hieronymus Bosch and the Queen of Sheba

Masaaki KAMBARA

College of the Arts,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2018)

Hieronymus Bosch drew a beautiful African black man in the Adration of the Magi. In the Garden of Earthly Pleasure, he draws fascinating black women. There are several points to interpret this. First of all, black people cohabit with white people together without any discomfort. Second, in the central panel, there are black women scattered, but in the right wing the hell does not include any black people. Third, a black woman with a peacock on her head in the central pond is especially the noticeable position. In European tradition drawing black women as Queen of Sheba, you can see that this woman has a noble atmosphere. Together with the theme of this altarpiece, here is an important point of interpretation. Through the compositional analysis of this work, we can find the “play of gaze” and the “hidden symbolism”. Many eyes are concentrated on this woman. Adam is staring at her at the Garden of Eden. Every man is walking around the center pond with animals and every female is bathing in the water. The eternal circular motion is supported by the central woman power. And in the center there is the Queen of Sheba. She has an apple-like fruit, but this is reminiscent of Eve in the Garden of Eden. In the foreground of the central garden, two black women have apples on their heads. The image of Eve as a seductor is already in the left Garden. There is an interpretation that this is not Eve but Lilith. It is not just a seductive figure but also a figure of the woman who awakens to self-sustaining ego who claims equal to Adam. It is also in sync with the Queen of Sheba. The hoopoe is in the center of birds staring at the Queen of Sheba. It is the bird that conveys her the message from Solomon. It is on the line connecting Adam and Queen of Sheba. What Bosch draws here is the appearance of men who are tossed by demonic ladies and resonate with the theme of Woman Power drawn vigorously in the same era. Black is a symbol of a new era for Bosch. It is a temperament of the same Melancholia as the owl.